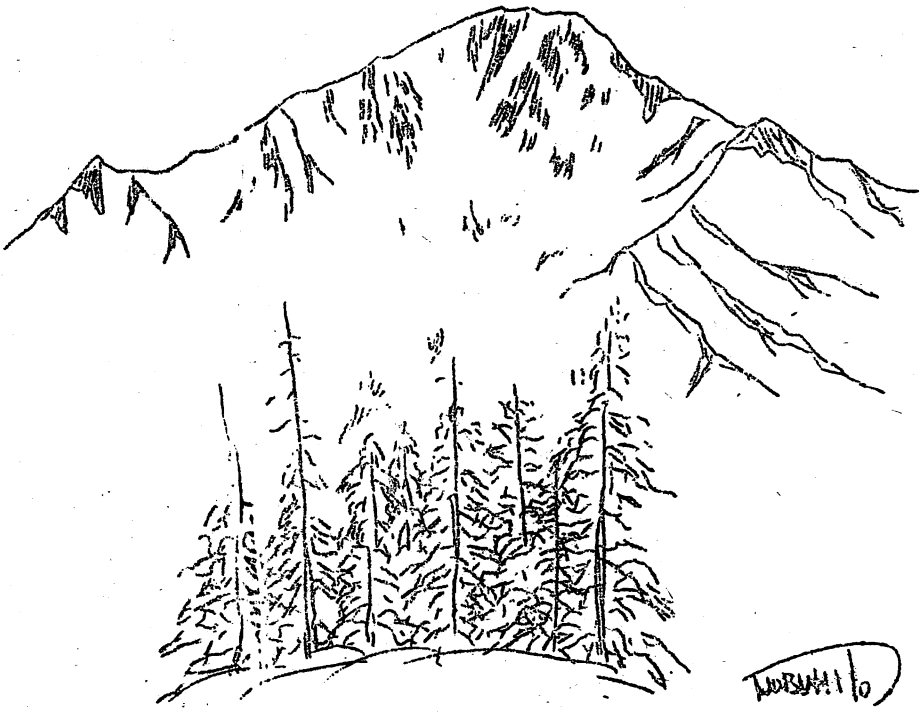
報告書

黒部源流

—'76, 3月の記録—



祖父平 S.H より黒部五郎をのぞむ

信州大学山岳会

伊那・松本山岳部・黒部源流Party

春山を終えて…　古橋孝夫

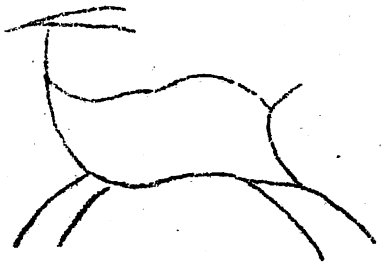
全員無事に下山できたことを心から喜びます。
山登りという観点から眺めれば今回の山行はその本来の意味からはずれているかもしれない。

しかし積雪期の山登りというものは私達にいろいろな形で呼びかけてくるものだろう　その一つの形としての沢の下降，源流の歩行であったように思う。

結果的に私達は，Peakらしいところはほとんど登らず，ひたすら沢を歩いた。冬の沢の，夏山や雪山のPeak Huntとは異なる危険は計り知れない，そこでの道具としてのスキーを忘れることはできない。スキーがいかに有効で頼もしい道具であるかは，誰もが感じたであろう。

とは言えスキーに関しては　まだ問題をかなり残している。なによりもPeakのそろった技術が要求されることは　ひしひしと感じる。部においてもスキーの体系的な指導を考えていったら，かなり大きな山行をなしえるものではないだろうか。

その他の点については　各人の感想をみてきたいたい。



行動記録

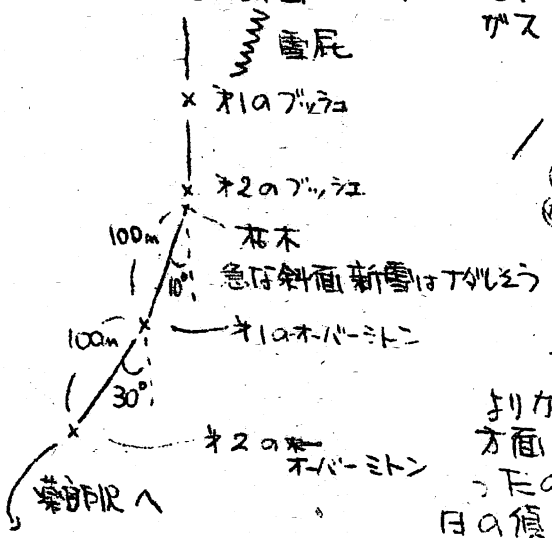
3/11　松本 ― 富山
17:52 発の鈍行に乗り富山駅　夜汽車の響を心地よく聞きつつ

/12　富山S ― 神岡 6:50 ― TAX ― 打保部落 7:40 ― 千沢小合手前の小屋 9:30
雨降る中をスキーをつけどツボ足。やはり雪が少い。途中ならスキーを引いて（なんと楽なことよ）。物置小屋らしきところで　半泡を決め込む

/13　小屋 ― 寺地山 ― 北ノ俣岳西方 2000m付近の雪原のはじっこ
6:10　12:30　14:50　（整穴まで？ S.H.）
天気はさえない。神岡新道は千沢小合から右岸の尾根をハシゴツブし（1793.8m）― 打保乗越の稜線へと登り。スキーをつけて水の平へおりる。（稜線までは登山者がワンゲルが先行していたのでステップがあり楽でした。スキーをつけてなら直い通しだけど。）もっとも乗越よりずっと手前で降りてほしい。一度スキを脱いで小川を渡るハメになった。そこからゴランジ平を経て寺地山へ向う。その頃からガスが出て来て視界がぜんぜんダメ、登頂は寺地山らしき所に着く（確認はできなかった。）途中上級生3人がルートを捜すため度々先行する。寺地山から先は剣とやせた尾根の北直下をスキーをはいて着いて行く（南斜面は、ナダレたりしていて危そう。）北ノ俣岳避難小屋を目指すも小屋の小の字を見つからない。ナダレで流されたのか見過したのか知らぬ。やむなく北ノ俣岳を正面に見据える大雪原にツェルトを張る。タテ穴式に掘って中にツェルトをはる。設営後、主稜線や、南の笠ヶ岳などがはっきりと見えた

/14　S.H. ― 稜線 ― 太郎平小屋 14:00 ← 偵察
6:20　8:30　10:00　12:40
北ノ俣岳がとってもきれいだ。やかましいTWVの連中を尻目にスキーで快調にラッセルして進む。（TWVの方々は合宿らしく下級生がしごかれていた）上部は完全にwind crustしており アイゼンにはき替え スキーを引く。主稜線、快晴。風強し。積雪期　黒部源流を目のあたりにする。見事な迫力だ。水晶、薬師が初めて目ぼく目に入る

眼下の赤木平へ雪煙が何か気を誘う。シールをつけ遠く槍を背景に太郎平へと向う。これが稜線かと疑いたくなるような たるいそして広い雪原である。もしもガスっていたらと思う心配が、後になって現実になったけれど……。一息ついた後テイサツに回りて向う、太郎山から東にのびる尾根を下って行く更に岡本、師田で下降し薬師沢へのルートを捜る。2200m付近まで下り、赤いオーバーミトンを2ケ所立木にくくりつけガスの時の備えとした。



/15 太郎平小屋
◎→◎ 8:20
(途中⊗に) ——薬師沢小屋
13:00

4:00に起床する。明るくなるまで待つが視界不良のため待ち。7:00過ぎよりガスが切れてだし薬師沢方面も眺められるようになったので、行動を起す。前日の偵察に従って薬師沢を目指すも雪が強風を伴って視界もよくないが強行に下降する。急斜面の手前でスキーを脱ぎツボ足で下る9:30頃 薬師沢に降り立つ。スキーをはいて左岸へ一度渡ってすぐ右岸へ戻る、そこから ちょい上の台地へツボ足で上って行く。そこまでに3ケ所スノーブリッジをわたったけれど 某氏はスノーブリッジのちょうど中央でスキーのTopが雪の中に入りそのままあに倒れるという古代末間の離れ技を行い他の者を心配させ又笑わせてしまった(尚スノーブリッジの下は黒部源流の流れが流れていたことをお忘れなく) できるだけ沢身に沿って右岸を進んで難なく左俣をわたったものの次の顕著な沢をツボ足でえらく高巻いてカベッケ谷で、やっとスキーをはく。一時疑似好天できれいに晴れて春山らしさを感じさせてくれるがすぐ崩れる。最後は左岸の尾根を大きく回り込む形で、黒部源流に降り立った。シールは ダンゴ

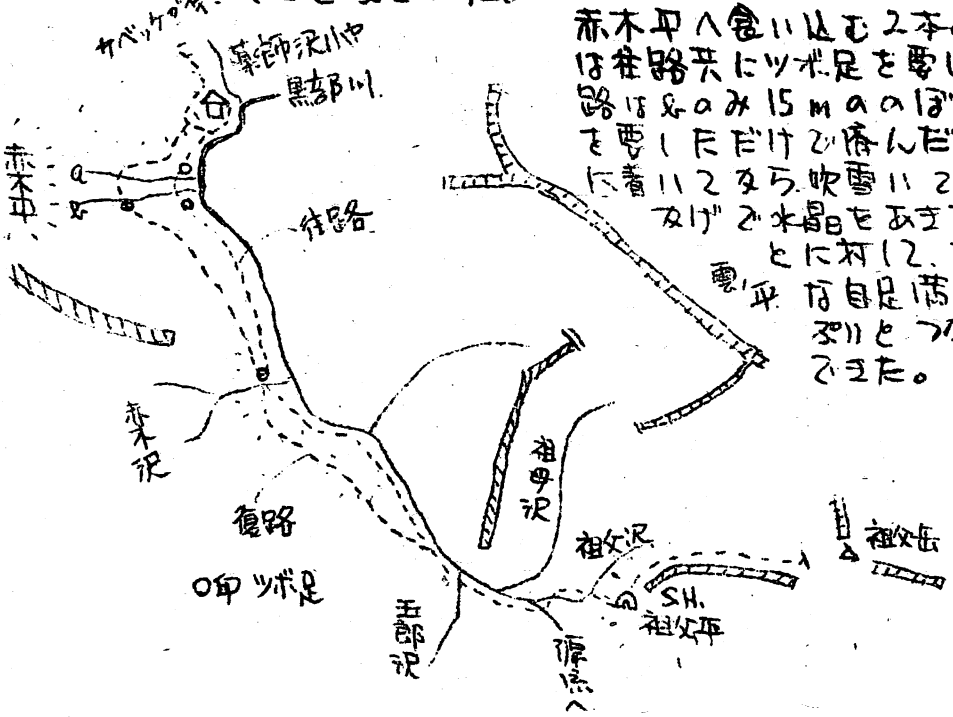
/16 草部沢小屋 —— 祖父平
O→① 6:30 11:50
小屋より左岸をツボ足を交えて高巻く。今年は雪が少くSnowブリッジがない(らしい)。赤木平へつき上げる2本の顕著な沢も板をはずして高巻く。赤木沢は合流から50mくらいのところにうまい工合いにスノーブリッジがかかっていたのでそいつを利用。陽がカンカン照り小鳥が啼りウーン春山だ 10:00頃 源流のわきで飯 源流の水を飲み川音を聞いていると自分達が今どこにいるのかわからなくなるそんな春の陽気だった カッコイイ黒部五郎をバックに快調に進む 祖母沢合流でカモシカに出合う 時ならぬ進入者にビックリした様子 祖父平ややチ谷を右岸にわたり祖父平に着く。祖父沢側の斜面に雪洞を掘る。積雪2〜3m

/17
起きてみると。外はミゾレ、しばらく待ちしたけれど視界も悪く結局 沈殿
本日、今回春山のテーマソング『春一番』に決定
キャンディーズ 2〜〜す。

/18 S.H. — 祖父岳2800m付近 — S.H.
6:30 9:30 10:30
朝方小雨がパラつく、そのうち視界もまいってきたので出発することにする。ピッパークの準備で水晶attackへ祖父沢はハナからやめて右手の尾根を祖父岳目指して登る。雪は雨で完全に腐ってラールがダンゴ状になる2800m付近くらいまで進んだが 視界も天気も悪くどうしようもない。引き返すことにするも、とりあえず樹林帯まで戻りツェルトをかぶって湯をわかす(30分位)結局天気も良くなりそうにないので雪洞に引き返す。斜面は勝気でゆるんでナダレが起きそう、それでも樹林帯に入りなんとかなった。また某氏スキーのTopを突込んでボゴまに倒れる(みじめー)。雪、みぞれ、あられ、雨・・・。明日もこんな様子だったら水晶attackは断念して草部沢小屋へ戻ることに決定。祖父平から見る黒部五郎の斜面が不気味にナダレていた。

/19 S.H. — 薬師沢小屋
7:35 11:00

朝方雪だったので、水晶をあさりめる。こう日に限って、陽が照ってくるなり是肉なものである。新雪は10cm位、ツボ足をさけるために往路よりも山側に進む。おかげで、思ったより早く小屋に着くことができた。



赤木平へ食い込む2本の沢a, bは往路共にツボ足を要しだが、復路はbのみ15mのぼりのツボ足を要しただけで済んだ。小屋に着いてから吹雪いてきた。みかげで水晶をあさりめたことに対して、ちっぽけな自足満足にどっぷりとつかることができた。

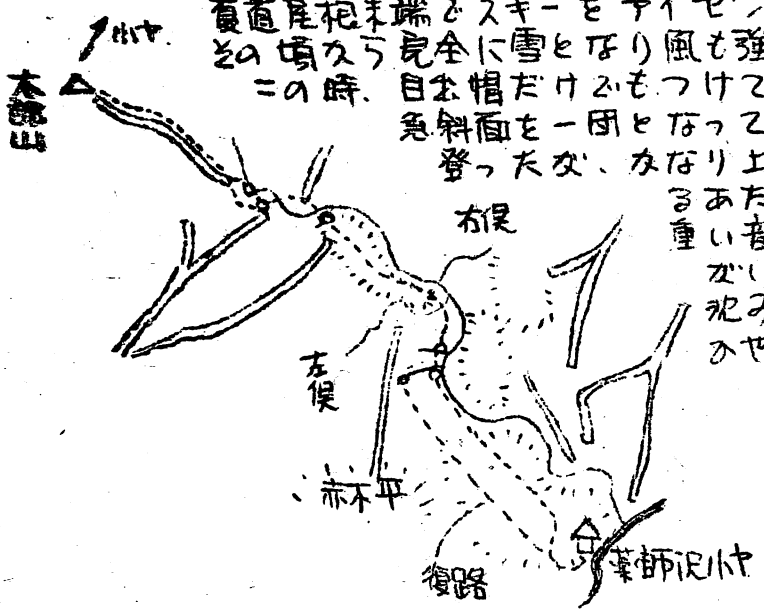
/20

池殿 太郎から下る時に持ってきたEssen 8日分のつもりが7日分しか持ってこなかったチョンボに気付き、池殿しろいても、ユウウツだった。

/21 薬師沢小屋 — 五俣出合 — 夏道尾根末端 —
10:20 12:15 13:20
太郎平小屋
15:50

昨日の天気図は、頼りない予報しか得られなかった。Essenのことも考え、視界の悪さもあり、待ち、9時の天気図をとることにするも、9:00頃から、晴間も見え リーダーは即行動することに決める。

方ペッケ沢原の左斜面に向け2進む、積雪40cm
左俣合流下流の高巻きをさけようとして2160mくらいまで
登り、ある沢の源頭（沢筋ではこの沢は不明瞭）をツボ足
で、一本尾根に出ると、もう一本更に大きい沢が切れ込ん
でおり、ツボ足で対岸下部の台地へ下る。（下部はスキーで
滑れる）。左俣は雪の下で難なくわたり台地をたどって
往路最初の渡河地帯へツボ足でおりる。



夏道尾根末端でスキーをアイゼンにはきかえる。
その頃から完全に雪となり風も強まる。思えば、
この時、目出帽だけでもつけていればよかった。
急斜面を一団となってラッセルしつつ
登ったが、かなり上部（急斜面の終
るあたり）でズンと
重い音と共に後の2人
がいたあたりがやや
沈み、前の2人も
おやりとする。

それでも無言で上へ進げ、緩傾斜帯でスキーをはく。ガス
の中視界20m位。表面はcrastしており シールがきかな
くなる。西風極めて強く、吹雪く。 稜線に出るも視界5
m位、まったく自分達の場所すらわからない（晴れてたら
小屋が見えるのに）。コンパスと地図を頼りにルートを定
める。運良くTWVの赤旗ポールを見つけ、導れて小屋に
たどり着く。小屋の手前の斜面も、非常にクラストしてお
り、アイゼンに替えて下る。靴もヒゲも目もみんな凍った。

○もし赤旗がなかったら きっとツェルトを出して様子を見ただろう。

1/22 吹雪の為 沈殿、思ったより小屋の中は寒い 後立
の連中どうしてるかと思う。

/23 ◎ ものすごい強風。昨日と同じく沈殿
18:00頃 西の方晴れてやっと峯師顔を出す
予備日が残り少いので峯師attackを断念する。

/24 ○→◎→①→⊗ 太郎平小屋 — 折立トンネル — 北鹿有峰寮
7:15 12:00 14:30

太郎—折立平は雪質良好しかしガスの中では歩けそうにない。最後に裏道尾根からはずれ西の支尾根をツボ足で下る。(裏道を忠実に下った方が良かったと思われる) トンネルを潜けた後は林道を行く。途中シールをはずしたがあまりにも滑べり過ぎるため、シールをつけたまま下るしかし雪がベタつき、ダンゴになってエライ。やっとの思いで有峰湖へ、北鹿寮の御好意で一室に泊めていただく。ストーブ暖かい。

/25 ○ 北鹿寮 — 大多和峠 — 大多和部落 — 西栗山駅
5:55 10:00 11:40 14:50

有峰湖の湖岸に沿って長い長い林道が峠まで続く。峠から少し行ってから、最初で最後、シールをはずして軽快に滑べる。なんと気持の良いことか・・・。つかの間、大多和部落で雪もおしまい。いまいましい重いスキーを背負いジャリの林道を駅へ駅へと下った。里は本当に春・春・春、雪溶けの間から顔をのぞかせる芽、フキノトウ、そして土。振り返る峰々に残る雪と僕たちのシュプール これほど春を感じたのは、生れてはじめてだ。

僕たちは、雪の中、黒部源流の水を
腹いっぱい飲んで来たんだぞ。まだお山
は冬だというのに ・・・・・

〈もってった装備一覧〉 (by O.)

メインザイル（9mm 40mと30mの計2本）　ハーケン（2-2-0-2）
ハンマー（2本）　カラビナ（5本）　シュリンゲ（5本）

ツェルト（3人用底割 片入口 2張）　ポリエチレンシート（1枚）
スコップ（剣先型 1本）　ノコギリ（1本）

ドライバー（プラスマイナス 各1本）　ジルブレッタ用サイドフックヒネジ
プライヤー（1本）　針金（2mmφ 5m）　細引（6mmφ 5m）
ロールペーパー（1巻）

ホエーブス（大1台）　ガソリン（750cc×16日分 12ℓ）　ジョウゴ
ナベ（中×1）　ヤカン（中2ℓ×1）　オタマ（1）　食器（5）

ロウソク（大2本と1/2）　ラジオ（MW・SW用1台）　予備電池（1組）
医療セット　携帯用天気図用紙（30ページ 1冊）　赤旗（10枚）

〈この他に、個装として特に〉

スキー1式（シール1組　ストックには針金を巻く）　アイゼン　ピッケル
雨具　細引（板をひっぱるため）　カラビナ（1枚以上）
ジルブレッタワイヤ（各1）

〈不足したもの〉

ロールペーパーは2巻不足　ロウソクは1本不足　予備電池もあと1組

〈余ったもの〉

ガソリンは2〜3ℓ残った。（次の山行の参考になる数字ではない）
※消耗品の不足は予想より気前よく使ったことが大きかったけれど、自でペーパー1巻 ロウソク1本は用意した方がええかもしれん。楽しみがラジオの声としたらバッテリーもよう使う。 4/5

〈われらの使いっぷりについて〉 (by O.)

○登攀具は使わんかったのでナンともよう言わんかったけど、あれで妥当なセンやないでしょうか。ザイルは40mでそろえた方がええかもしれへんね。
○ツェルトは片入口よりは両入口の方がよろしな。スコップ、ノコギリもしっかりしてて良かった。角スコより剣スコがええのは梅池で経験済み。ただし角スコは穴堀りより雪かきに向いてる。ポリエチレンシートは余計なようでも雪洞内・ツェルト内で側面からの滞れを防ぐのに役立った。ひろったポリエチレン発泡シート（等身大）をサイドに使うた人もいて、御利益あったらしい。
○ホエーブスのでかいのをもったのは機械の調子も良く空炊きも効いて有難かった。ガソリンが余ったのは、調理の簡単素化や（　　使用）にあずかるところが大きい。ガソリンの計算が誤まっているとまでは言いにくい。
○携帯用天気図用紙は前日分との対照が容易でしかも作図のごまかしが効くので気圧配置の大勢を表現しやすくすぐれている。（ただし新人訓練向きとはいえない。）

○今回、個装として、ストックに針金を巻いて行くことにしたが、1mmくらいの手で切れるほど細いものと、2mm以上のじょうぶなもの と の2種類をもつやり方が重宝した。　細い径のものでザックの補修など容易である。

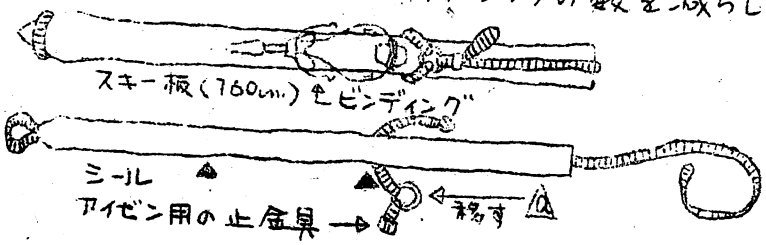
○赤旗は、リーダー、サブリーダー又は偵察に出る者がそれぞれ常にもち歩いた方がええ。（おかげでミトン片方なくしてしもた。）

○今回、ジルブレッタに揃うたおかげで、カンダハーの皮バンドの切れる心配は初めからせんで済んだ。　1度古いワイヤが切れたが、その場ですぐ交換できた（予備ワイヤをもち、しかもすぐ取り出せた）ので事無きを得た。山用締具としてのジルブレッタは使い易く、すぐれた働きをもっているように感じた。　強いて言えば、歩行時のエッヂングの際、板から靴がずれてエッヂをたてづらいことがあった。

○各人のスキーは、160cm・167cmあたりから最長190cmが1人という組合わせだった。　ラッセル30cmをこえると160cmあたりではトップが上に出にくうなるように見える。　とはいえ春山では充分用をなす。短3本長1本で、190cmの板はキックターンのさばきにやや手こずったが、これは短かい板向きのルート作りのせいもあった。

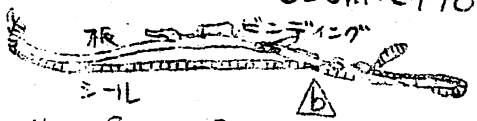
○シールはナイロン3本・アザラシ1本。　ナイロンのうち1本は裏にビニル不織布が張ってあり、雪がつきにくかった。　アザラシはよく滑べった。

○ナイロンシールの1本はサイドフックの数を減らしたが、支障なかった。



図のように ⓐ の位置にあった締め上げ部分をビンディングの直近に移し、▲印のスカ所にあったフックテープを切り落とし、更に、締め上げ金具に は アイゼン用に使われているものをあてている。

長い板ならともかく160cm～170cmほどの板なら採用できると思う。



この方がラッセルのとき、特にブレーカブルクラストをすすむとき多少楽になる。　エッヂングも容易。

○シールの各テープにはゴムテープを巻き、破れる度に巻き直した。

○最終日、有明湖岸の林道で、1本のシールのテープの縫い糸が切れてテープがシール本体からはずれるというトラブルがあった。　予備を1本もっていたために救われたが、スキートップやストッパーがF（さいわい）だけでなくシールの予備も考えるに値することを教えられた。　しかしこのトラブルの原因はシールの縫い糸の消耗にあるのやけど、1シーズン使うたシールの糸は信用でけんと思わんなんらしい。

○シールのテープについて言うと、シール本体への埋め込みを深くして、シーズンごとに補強した方がええ。　今回切れたんは絹糸で ⓑ の位置のもの。　糸の材質は何が向いてるかようわかってない。

○今回、使用2年目のキスリングの背負環取付部の皮と帆布との縫い糸が切れたりしてしまった。

た。このときストックした色いた細い針金が役立った。
○ワカンはもたんかった。が、結果的には不要やった。
○190cmの板はやはり他よりもぐりにくかった。スミールは、あたりまえのことながら、板の長さによく合ったものがいい。水気を含むとシールは伸びるものである。シールの締め具は凍っても締められるアイゼンバンドのようなものがいい。スミールのサイドのテープ又は止め具は、特に長い板をはくときには、しっかりぶなものが欲しい。（この項のみS）

〈メシについて〉 (by M.)

○致命的なミスひとつ。メシのカートンに何日分ははいっているが、しっかり箱にマジックで書かなかったために、源流におりたとき、8日分きったつもりが7日分しかなかった。大事には至らなかったが、深く反省する。
○スキー山行ということで、できるだけ軽量化を図ってみたつもりだ。ところが思わぬアクシデント（米が予定以上にはいっていたり）して、予想したような不満も出なかった。とはいえ、山行前に、メシがどれだけ少ないかみんなにきっと徹底して認識させておいてもよかった。
○ヤミカンは、肉を入れず、コーンを多く用い、更にホウレンソウを使った。肉のかわりには凍豆腐を用いた。これらすべては大好評だった。
○パン&スープは夕食には向かない。夕食はやはり米がいい。パンは重ばるし、水分の多いものは凍る。せいぜい朝食の主食だ。
○信州バは乾シイタケのダシがきいて いつもとってもうまかった。
○行動食のビスケットは、マヨネーズかハチミツでもつければよかった。水なしでは食べにくい。
○朝食は行動食より量を増やすべきだ。朝は行動より空腹を感じる。
○ようかん 甘味ばっかりだったが、つかれている時なんか、なかなか好評だった。
○長い山行では、後半バテないためにも、しっかりエッセンを摂るべきだ。

〈動きのまとめについて〉 (by. O)

①行程発越から水の平：トップをやったOの地形図読み取り不足。
②北の俣ヒナンバ屋の発見不能：小屋の所在やその有無を関係者に問い合わすべきやった。
③その後北ずの大郎平へのルート間違い：直前の地形確認を徹底すべきやった。見込みで動いた。
④大郎山の地形確定把握：O&Mは更に西側斜面に迷い込む可能性を考えておいたらよかった。
⑤ホシルより黒部下降に於ける夏道尾根斜面の判断は正しかった。
⑥スノウブリッジを渡るのに、Sをまっかりトップに出したのはF・O・Mの過失やった。
⑦Sがスノウブリッジを不用意に滑って渡り転倒したのは、Sのスノウブリッジ[illegible]認識不足やった。
⑧[illegible]斜面を黒部下降路にえらんだのは、時間と労力の節約に役立ったが、上部急斜面では雪崩について危険な極面があった。（殊に下降時）

⑨ 水晶岳 Attack を Rush-Tack [illegible] したのは、極どい面があるものの、その極どさは Rush という方法自体がはらんでいるものであり、最大のポイントとなる天候の判断も極めて妥当やった。

⑩ 最終的に水晶を諦めたのは、過度の賭けをさけて余裕をもとうとした点で評価できる。

⑪ 3/21 の出発の決断はアイマイさを含んでいたが、結果的に当たった。
聖岳は見に荒れた。

⑫ 茶臼岳の登山行は、降雨後冷えた上に新雪30cmという条件下であり 気を集りすぎて雪崩への配慮が甘かったのではないか。 又 おせったことについては、春のこの山域についての認識が甘く、計画時から予備日が少なすぎたことによると考える。 (この項 M)

⑬ 大郎山へもどるのを楽観しすぎていた。 夏道長根末端で目出帽をハナしておいた方が良かった。 沢筋は無風でも稜線で出くわす強風や、稜線に出るまでは落ちついて休めないことはわかっていてもよかったはずだ。

⑭ 夏道長根のツボ足は正しかったが、直登するときも間隔をあけるべきかどうか迷う。 山行中もっとも雪崩の危険に直面した。 しかしさけるわけにはいかなかった。

⑮ 予備ワイヤを すぐ出せるところに入れたSの判断は、当然とはいえ学ぶべきや。

⑯ 大郎山でのワンテリングで、コンパス、地図をすみやかに出した所は良かった。
が、惜しむらくは [illegible] で地形植生の事前確認が、 (この項 M)

⑰ TWVの赤旗で救われたが、ガス中での行動方法を今後研究すべきや。

⑱ 茶臼岳 Attack はできたやろうけど、追い込まれんことを考えると極端なところ。 高気圧で晴れるとは言いきれんかった。 冷静に高原気象の知識があったらどうやったか。

⑲ 折立平への夏道長根を はずしたのは、未知の谷に対する楽観や地形の安定性に対する [illegible] 集中を怠ったことによる過失やった。

⑳ 有峰湖への林道滑走で、シールをはずしきれんかったのは山行の未熟や。

㉑ 太多和峠よりの滑降は労力と時間をむい効率的でき判断は正しかった。
ただ 石コロにスキーを ひっかけたときのショックについて [illegible] た。

〈下田くんの反省〉

計画のときに、自分の行く山行に具体的に [illegible] 地域の [illegible] に資料を調べる積極性に欠けていた。 やはり [illegible] 行くかぎり [illegible] 感度が弱く、ルートファインディングや現在位置を知ることについて [illegible] に頼りすぎていたように感じる。 [illegible] 生の時をもっと言うべきか。 山行は2年生となるので(どうしよう) 強く求めなければならない。

〈三宅くんの感想〉

天候には恵まれなかったが、初めての雪山 初めてのスキー山行、初めての雪洞、記録更新の日数、何から何まで初めてづくしの山行だった。
--中略-------自己の山行を確立していくためにも今回の山行は大きなプラスになった。 でかい計画・長期の山行 [illegible] とっとりたいと思う。

〈いろいろ思いあたることのあるモロタくんのひと言〉

------なんだかんだいってもチームワークがよかった。4人Partyということで、まとまりがなければ何もできないということもあっただろうけど、言いたいことが言える雰囲気があったことも大きいと思う。もちろん最終決定はリーダーが下すわけだけど、岡本や俺も思ったことが言えたし、それが俺たち自身この山行を担っているという意識を生んでくれて、何かと上級生に指示されるがままだった合宿とは違った新鮮味を与えてくれた。こういういい意味での自由な雰囲気というのはこれからも大切にしていきたい。

〈モロタくんの感概〉

春山の魅力のひとつは、何といっても下山路にある。タニネの葉ざま越しに見上げる空はどこまでも青く、陽光にキラキラ輝く雪面の上をウサギやリスが跳びはねる。樹林の遠くからは小鳥のさえずりが流れてき、雪溶け水の涼しげな瀬音のもとには、長い間緊張していた俺たち皆の心を和ませるかのようにフキノトウが顔を出している。山全体が春の息吹きにさわめく中に、自己の存在の確かさを胸いっぱいに抱きつつ人里に向かう満足感は誰もが感じてるものじゃないだろうか。

〈そうひと言〉

登山とは「山に登ること」すなわち上への志向が暗黙の了解みたいになってる。Peak-Huntingは言うに及ばず、壁をよじることもこの上への志向からはずれるものではない。

しかし山ってのはそんな狭い視野のみに限られるべきものなんだろうか。もっと、例えば尾根を横切り沢から沢へ彷徨する、とか、ひとつのピークをめざすのでなく、山を越えその先にある海岸線なり岬なりを志向する山行があってもいいんじゃないだろうかと思う。積雪期に於ても同様沢に降りるという、いわば下への志向を意図した山行が考えられるべきだし、それが「源流に立つ」ことをめざした今回の山行のすべてだったと思う。

この山行は、山を視る、より大きな意味で山を理解する、という点でこれまでのどの山行よりも大きな勉強になった。

〈オカモトくんが降りてすぐ思ったこと〉

北アの奥懐、黒部の源流に板を滑らすのを楽しみにはいって、南呆のように引き摺されもせず、人を言うこリーダーほどに気をもむこともなしに、すいすい暮らしておりて来て満足した。

けれどもそれ程もうも、ようやくピーク踏むつもりもあらへなんだ。たらたらと面白味を帯びて平べったい源流におりて、そこが平和でありさえすりゃ良かった。その限りで天気も良し、人も良し、山に恵まれた。

その次の何ものか、その山の向こうにある山が何か、を、めざしたわけやなかった。ただそこに行くことに意味があった。ある工夫に滑り込んでそこに身を置けば良かった。

こういう山への関わり方の流れる先などこか。スキーという道具の魅力にからめとられて、のぼるのを忘れ、あるくことを思い出したにちがいない。

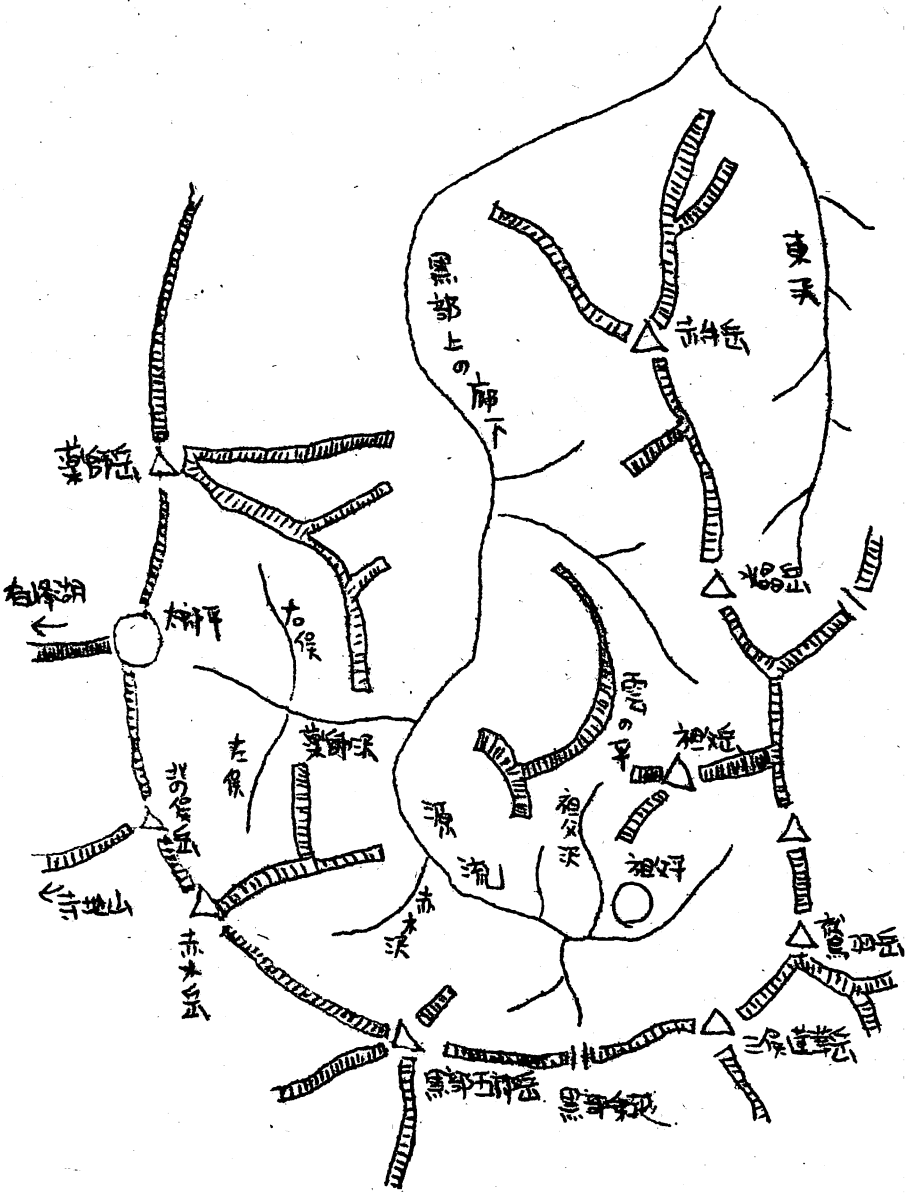
最後に、
下山の夜、気もちよくわたしたちを
泊めてくださった北海道峰岳の方々と
入山前わたしたちのトレーニングの
ために榊沢神の国見小屋を提供して
くれた早稲田大学山岳部の皆さんに
わたしたちは深く感謝します。

'76春の黒部源流 報告書

1976.11.30、発行 130部

古橋孝夫
岡本真一
師田信人
下田章

松本市旭 信州大学山岳会
伊那松本山岳部


黒部上の廊下
東天
赤牛岳
鷲羽岳
有峰湖
太郎平
右俣
左俣
薬師沢
北の俣岳
寺地山
赤木岳
赤木沢
源流
雲の平
祖父沢
祖父岳
祖父平
鷲羽岳
三俣蓮華岳
黒部五郎岳
黒部平

黒部源流・概念図

春山 黒部源流報告書

S.I.M.A.C.

S.A.C.